

二人称単数代名詞 *T-Form/ V-Form*:
The Awntyrs off Arthure に関する
 Authorship 論争についての一考察

新 居 明 子

序

15世紀前半に書かれた作者不詳の頭韻詩 *The Awntyrs off Arthure at the Terne Wathelyn*¹ (以下 *The Awntyrs* と略す) は、二つのエピソードから構成されている。一つ目のエピソードは、王妃 Guinevere の亡き母が亡霊となって現れ Guinevere と Gawain に宗教的な教えを授けるというものであり、二つ目のエピソードは、Galeron という名の騎士がアーサー王の宮廷に現れ Gawain と一騎打ちをするというものである。この二つのエピソードについては両者のテーマや内容があまりに異なっているため、これらはもともとは別々の作者が書いた別個の作品だったのではないかと考える複数作者説と、それに反対する同一作者説とがあり、authorship 問題としてこれまでも様々な視点から議論が展開されてきたが、論争に終止符を打つべき決定的な証拠がないために未解決の問題のままとなっている。²

ところで、*The Awntyrs* の書かれた時代とも重なる ME 期からルネッサンス期にかけては、“thou” と “ye” という二つの二人称代名詞が複雑な発達を遂げた時代であり、その用法や用例に関して主に英語史の視点からかなり詳細に議論されてきたようである。ところが、こうした先行研究は Chaucer や *Gawain-poet*, Shakespeare らの作品を中心とした、各時代の主要作品を基に議論を進めているため、本論が扱う *The Awntyrs* における二人称代名詞が研究対象として取り上げられることはなかったようである。

そこで本論では、*The Awntyrs* の authorship 研究に貢献すべく、“thou”と“ye”という二つの二人称代名詞の作品内における用法を具体的に検討しながら、二つのエピソードに見られる共通点や類似点を指摘し、同一作者の可能性を論じてみたい。そこで、まず英語の二人称単数代名詞の歴史的発達とその用法について概略する。そして次に *The Awntyrs* についての authorship 研究の主な流れを説明した後、この作品において二人称単数代名詞が実際にどのように用いられているか具体的に検討してみたい。なお、便宜上本論では、先行学者に倣い二人称単数代名詞である“thou”の全ての語形 (“thou” “thee” “thy” “thyn” “thine” “thysel” 等) を表す総称として “T-form (T)” を用い、また元来は二人称複数代名詞であったものの次第に単数形としても用いられるようになった “ye” の全ての語形 (“ye” “yow” “you” “youre” “your” “yours” “yourself” 等) には “V-form (V)” を総称として用いることにする。³

I. 二人称単数代名詞の歴史的発達とその用法

ME 期における二人称代名詞の文法的な格変化は、以下の表 1 の様に分類される。

	主格	対格	与格	属格
単数形	thou	thee	thy, thyn	thee
複数形	ye	yow (you)	youre (your)	yow (you)

表 1⁴

つまり、現代英語と異なり ME 期には二人称代名詞に単数・複数の区別があり、さらに単数形の主格は “thou”，対格は “thee”，そして複数形の主格は “ye”，対格は “you” というように、それぞれに異なる格変化形があった。

しかしながら, Curme や Jespersen, Mustanoja ら多くの文法家が指摘しているように,⁵ ME においては “plural pronoun for polite address to a single person” (Strang 139) というように, 二人称複数代名詞が単数として機能する特殊な用法が存在したため, 実際には二人称代名詞の単複形 (T/V) の区分は, 上記の表 1 のように明確ではなかったのである。

The use of the pronoun of the second person plural for the second person singular is characteristic of respectful and polite address. The origin of this custom is to be found in the plural of majesty. Since the sovereign speaks of himself in the plural, those who speak to him address him in turn in the plural as a sign of respect. The earliest instances of the plural of respect have been recorded in a number of Latin texts of the 4th century A.D. . . . (Mustanoja 126)

ローマ皇帝への尊敬の念を表すために用いられ始めたラテン語の “plural of polite address” は, 他のヨーロッパ言語にも波及し, やがて英語にも影響を与えることとなった。したがって, ME における T-form/V-form の区分は, 実際には話し手と聞き手の関係によって以下のようになっていたと言える。

	主格	対格
単数形	thou or ye	thee or you
複数形	ye	yow (you)

表 2 (Jespersen 44)

ちなみに英語では単数形を表す V は 13 世紀の文献に初出しており, おそらく 16 世紀頃にはかなり定着していたと考えられている。そして次第に,

用法に関係なく “unmarked” な形として一般に広く用いられるようになり、18 世紀頃には、もともとの単数形であった “thou” や “thee” などの *T* は、一部の方言や文学作品等を除いて、ほとんど使われなくなった。また、次第に格変化が消滅するとともに、18 世紀頃までには主格であった “ye” が対格の “you” にとって代われ、“you” 一語が二人称代名詞を表すものとして使われるようになった (Curme 15-17)。

すでに ME 期には、単数形として用いられた *V* の用法は一般的な敬称としてかなり拡大されており、例えば同じ身分の相手に対してもしばしば丁寧さを示すため用いられるようになっていたようである。以下の表 3 は ME 期における *T/V* の主な用法をまとめたものである。

<i>T</i>	<i>V</i>
(1) address to social inferiors	(1) address to social superiors
(2) address to social equals (lower class)	(2) address to social equals (higher class)
(3) address in private	(3) address in public
(4) familiar or intimate address	(4) formal or neutral address
(5) contempt, scorn	(5) respect, admiration

表 3

(Wales 116)

T は(1)社会的に劣る相手に対して、(2)下層階級での社会的に同じ立場の相手に対して、(3)プライベートな場で、(4)親しい間柄で、あるいは(5)軽蔑のニュアンスを含める際などに用いられ、一方の *V* は、(1)社会的に目上の者に対して、(2)上流階級での社会的に同じ立場の相手に対して、(3)公共の場で、(4)格式ばった間柄で、あるいは(5)尊敬のニュアンスを含める際などに用いられていたということになる。

しかしながら、こうした *T/V* の用法は ME 期から一部ルネッサンス期の

英語において, “the English seem always to have moved more freely from one form to another than did the continental European” (Brown and Gilman 265) と指摘されているように, 当時の他のヨーロッパ言語と比べそれほど厳密に区分されていなかったため, 例えばある特定の話し手が一人の聞き手に対して, *T* と *V* の両方の二人称単数代名詞を任意に用いるということがしばしばおこった. このような曖昧な *T/V* の使用例を明らかにしようと, Chaucer や *Gawain-poet*, Shakespeare などの当時の代表的作品における *T/V* の用法についての数多くの研究がなされている.⁶

例えば, David (1967) は 14 世紀の頭韻詩 *Sir Gawain and the Green Knight* における *T/V* の用法について以下のように述べている.

Though the general lines are clear, there is some inconsistency. Bertilak uses *pou* at 1674-79, and in 2444-70 he changes from *pou* to *3e* and back again in a friendly speech which might have been expected to call for the plural throughout. There is a similar mixture at 1068-71. In view of these variations too much cannot be made of the lady's occasional *pou* to Gawain (1272, 1746, 1799), or Gawain's response at 1802. (145)

つまり Davis は Bertilak や城主夫人が, 親称である *T* と敬称である *V* を Gawain に対して一貫性なく使用していると指摘している. Kellner (1968) もまた David と同じように, “in most of the other instances both *pou* and *ye* seem to be used indiscriminately” (172) として, *Sir Gawain and the Green Knight* の *T/V* 使用には説明不可能な用例があるという立場をとっている.

その一方で, こうした *Sir Gawain and the Green Knight* における *T/V* の交代移行は, 全て *Gawain-Poet* の意図的なものであるとする動きもある. Evans (1967) によれば, 例えば Gawain が城主夫人との会話において親称

の“thou”を一度だけ用いているのは、Green Knight との対決を目前に控えた Gawain の心の乱れを表現するために *Gawain-Poet* が意図的に用いたものであるとして、作品中にみられる T/V の交代移行は物語の展開に“dramatic effect”をもたらしていると指摘している (42)。Cottle (1969) や Metcalf (1971) も Evans と同じく Davis の意見に異をとらえ、作品中の T/V の用法については、話し手と聞き手の社会的地位のみではなく、登場人物間の人間関係や物語のコンテキストという視点からも考慮する必要があると主張している。⁷

II. The Awntyrs における二つのエピソード

1) Authorship 論争

The Awntyrs は、15 世紀前半に書かれたと考えられている 715 行からなる作者不詳の頭韻詩である。現存する写本は 15 世紀半ばから後半にかけて書かれたものが全部で 4 つある (Thornton Romances として知られる the Lincoln Cathedral Library ms. 91, the Bodleian Library ms., Douce 324, the Ireland Blackburne ms., そして the Lambeth Palace Library ms. 491)。それぞれの写本は北部、中西部、南部という異なる方言で書かれているが、Hanna や Christianson は、こうした方言の違いは個々の写字生の方言の違いによるものだとして、この作品はもともとは北部方言で書かれたものであろうと推測している (Hanna 48-49; Christianson xvi)。

先述のとおり、この作品はストーリーの全く異なる二つのエピソードから構成されており、そのために複数の作者の存在を主張する複数作者説とそれに反対する同一作者説との間で、未解決の問題として authorship 論争がなされている。そこで二つのエピソードの差異性を確認するため、各エピソードのあらすじを概略しておきたい。一つ目のエピソードは、アーサー王や円卓の騎士たちが Tarn Wadling で狩をしている際、狩の一行から離れてしまった王妃 Guinevere と Gawain が、恐ろしい姿をした Guinevere の亡き母

の亡霊に遭遇するというものである。亡霊は、自分の魂の救済のためにミサを行うよう Guinevere に頼み、さらに “pride” の罪を犯さぬよう、また常に貧しい者たちに慈善を施すよう諭す。また Arthur 王が権力のままに領土を広げているのは貪欲であると非難し、円卓の崩壊を予言した後二人の前から姿を消す。二つ目のエピソードは、狩から戻った一行の前に Galeron と名乗る見知らぬ騎士が恋人と共に突然現れるところから始まる。彼はアーサー王に奪われた自分の土地を取り戻すために円卓騎士団に挑戦し、Gawain が彼と一騎打ちをすることになる。激しい戦いの末、Galeron の恋人の懇願を受けた王妃の仲裁で戦いは終わり、ロマンス作品の常套であるハッピーエンドとなる。

このように物語のあらすじのみを単純に追ってみると、確かに二つのエピソードの内容は大きく異なっているように思われる。複数作者説を支持する学者たちは、この差異性ゆえに、二つのエピソードはもともと別の作者が書いた別個の作品だったのではないかと考えているようである。その代表として挙げられる Hanna は、エピソードの内容以外にも、“Evidence which points to the possibility of two separate poets may be discussed under four headings: the handling of iteration, of stanza linking, of end-rhyme, and of the alliterative long line” (19) として、反復表現や、スタンザのつながり、end-rhyme の用法など、文体や韻律の面から二つのエピソードが内包する根本的な違いを主張している。また Dean のように “Resolution of this problem is not easy, but as the view that separates the parts seems easier to defend than the one that attempts to join them” (79) として、authorship についての断言は避けているものの、作品を論じるにあたってひとまず複数作者説の立場を取る学者も多いようである。

一方、同一作者説の代表として挙げられるのは、この作品の “diptych structure” を主張する Spearing である。Spearing は二つのエピソードの差異性は認めつつも物語上の類似性も指摘している。

... there are also parallels and links which are equally obvious, though they have received less attention. In both parts of the poem, the Arthurian civilization is faced with the challenge of an apparently hostile outsider: ... In both parts Gawain is the leading representative of the Round Table, and in both Guinevere also plays a leading role. (185-86)

そして、“We seem to be faced with a literary structure comparable with a favorite pictorial form of the Middle Ages, the diptych.”として、2枚の別々の絵を組み合わせて1枚とみなす diptych のように、*The Awntyrs* も、二つのエピソードを合わせてひとつの作品とみなすべきだ、と主張している。彼はその他にも、作品のシンメトリー的構成や両エピソードに共通するテーマの存在なども指摘している。Phillips もまた二つのエピソードを比べ、syntax や diction の面ではあまり大きな違いが見られないこと(69)、内容についてもアーサー王の領土拡大という問題が二つに共通していることを指摘し(85)、同一作者の可能性を示唆している。

このように、同一作者説、複数作者説という二つの相反する立場から、*The Awntyrs* における二つのエピソードの素材や文体、文法的要素など多様な面についての差異性や類似性が検討されてきたものの、どちらの主張にも一定の妥当性があることや、そもそも現存する四つの写本がオリジナルの写本ではないと考えられることから、authorship 論争に未だ決着がついていないというのが現状である。

2) *The Awntyrs* における T-form/V-form

The Awntyrs の時代には、二人称単数代名詞として T だけでなく敬称としての V もかなり一般的に使用されていた。そこで次に、本作品において T/V がどのように使い分けられているのか具体的に検討し、二つのエピソード

ードを比較してみたい。

Hanna は自らが編集したテキストの glossary において、二人称代名詞の T-form と V-form を以下のように説明している。

pou: *pron.* thou, you (used as a familiar form or to a speaker's inferiors) (183)

ye: *pron.* you (the plural and polite singular form) (188)

この定義は、表3に示した T/V についての Wales の五つの分類を簡略化したものと考えられるであろう。ところが、作品中の T/V について実際に調べてみると、Wales や Hanna の定義とは少々異なる結果となったのである。

まず、両エピソードにおける T/V の使用頻度を数えてみたところ、以下の表4ような結果が得られた。

	T	V (singular + uncertain)
Episode 1	61	14 (1 + 13)
Episode 2	38	2 (2 + 0)
Total	99	16 (3 + 13)

表4

この表からは二つのエピソードに共通して、Tの使用数がVをはるかに上回っていることがわかる。Tは両エピソードをとおして合計99例もあり、一方のVはわずか16例である。ちなみに、この16例のVには、複数の相手を明らかに指すものは含まれていない。例えば、“The barne playes at be balle /pat outray shall you alle,” (310-11) の“you”は“alle”という複数の相手を指しており、また“For king and emperour, / Thus di3t shul ye be.” (168-69) における“ye”は“king and emperour”を指している。16例のVは、こうした用例を全て省いた、単数形として用いられていると思われるV

の合計数ということになる。

しかしながら、この16例のうちの13例については、実は単複の区分がいまひとつ不明瞭であった。この件に関しては後ほど詳しく述べたいが、ひとまずこの13例も除外してみると、単数形として用いられていると断言できるVは、両エピソードを通してわずか3例のみである。ここで明らかなのは、不明瞭なVを考慮するか否かにかかわらず、二つのエピソードに共通してVよりTが圧倒的に多く使われているということである。

次に、話し手と聞き手の関係に基づくT/Vの使用頻度を、各エピソード間で比べてみたい。*The Awntyrs* における会話は全て、Gawain、王妃Guinevere、Guinevereの亡き母（亡霊）、Arthur王、Galeron、そしてGaleronの恋人という6名の間で交わされている。さらにこれらの登場人物は時としてキリストへの祈りを口にしてるので、そうした際に用いる二人称単数形の例も合わせてまとめると次頁の表5のようになる。

表5でまず明らかになるのは、登場人物たちの間にある身分の差にもかかわらず、どちらのエピソードにおいてもGawainと亡霊の二人を除いては誰もVを使っていないということである。彼らは皆上流階級に属し、そこにはArthur王を筆頭に、王妃、GawainとGaleron、最後にGaleronの恋人と続く歴然たるヒエラルキーが存在する。Guinevereの亡き母については、亡霊の姿をとっているため、その地位は煉獄という視点からも考慮する必要があるが、いずれにしても、その他の登場人物の間にあるヒエラルキーの存在にもかかわらずGawainと亡霊を除く全員が、身分の差や文脈にかかわらず二つのエピソードを通して単数の相手に対しTを使用する傾向にあるようである。したがって、T/VについてWalesがまとめた表3の分類やHannaのglossaryにおけるT/Vの定義のような明確な区分は、必ずしも*The Awntyrs*には当てはまらないということがわかる。

具体例を挙げると、Galeronの恋人がGawainと戦う自らの恋人の命乞いを王妃Guinevereに懇願する際、“Lady makeles of might, / Haf mercy

Episode 1	T	V
Gawain to Guinevere	0	1
Gawain to the ghost (Guinevere's Mother)	3	0
Gawain to Christ (or God)	1	0
Guinevere to Gawain	1	0
Guinevere to the ghost (Guinevere's Mother)	21	0
Guinevere to Christ (or God)	3	0
The ghost (Guinevere's Mother) to Gawain	5	11
The ghost (Guinevere's Mother) to Guinevere	27	2
Episode 2		
Gawain to Arthur	0	2
Gawain to Galeron	9	0
Arthur to Gawain	5	0
Arthur to Galeron	11	0
Galeron to Arthur	5	0
Galeron to Gawain	2	0
Lady to Arthur	1	0
Lady to Guinevere	1	0
Guinevere to Arthur	4	0
Total	99	16

表 5⁸

on yondre kni3t / That is so delfull di3t, / If hit be thi wille" (621-624) と
 して、自分より身分が上でかつ自分の嘆願相手である王妃に対して、“thi”
 という T を用いている。Wales の分類によると T は(1) address to social
 inferiors という状況で用いられるべきものであるが、*The Awntyrs* では社
 会的に劣る立場の Galeron の恋人や Galeron が自分より高位の Guinevere

や Arthur 王に対して用いているのである。また(2) address to social equals の場合、上流階級の者同士の会話では V を使うと分類されているものの、本作品では Gawain と Galeron はお互いに対して T のみを使っている。同様に、T は(3) address in private となっているにもかかわらず、二つ目のエピソードにみられる宮廷という公の場での会話においても、登場人物たちはやはり T を用いている。

このように T の使用頻度が圧倒的に多いなか、どのような状況において V が用いられているのであろうか。表 5 からわかるように、作品中にみられる 16 例の V はすべて Gawain と亡霊だけが使用しており、このうちの 3 例が Gawain、そして 13 例が亡霊によるものである。ここで注意が必要なのは、実はこの亡霊による 13 例の V は全て、単数の相手を指しているとも複数の相手を指しているともとれるような不明瞭なものだということである。13 例の V を含む亡霊のセリフは以下のとおりである。

I am comen in pis cace / To carpe with your quene. (142-43)

‘bus deth wil 3ou di3t, thare you not doute; (170)

‘Your king is to couetous, I warne pe sir kni3t. (265)

And 3our chivalrous king chef shall a chance: (269)

‘Fraunce haf ye frely with your fight wonnen; / Freol and his farnet,
fey ar pey leued. / Bretayne and Burgoyne is both in 3our bandoun, /
 And al pe dussiperes of Graunce with your dyntes deued. (274-77)

Yet shal be riche Romayns with you be aurronen, / And with be
 Rounde Table be rentes be reued; / That shal be Tyber in true tym-
 ber you tene. / Gete be, Sir Gawayn; / Turne be to Tuskayn. / For ye
shul lese Bretayn / With a kni3t kene” (280-86)

Hit shal in Tuskan be tolde of be treson, / And ye shullen turne ayen
 for be typing. (291-92)

例えば亡霊が Gawain に円卓の崩壊を暗示する際：“Gete be, Sir Gawayn; /
Turne be to Tuskayn. / For ye shul lese Bretayn / With a kni3t kene”
 (1283-86)と、Tである“be”を2度使って Gawain に語りかけているが、そ
 の後一度だけ Vである“ye”を使っている。この場面における聞き手は
 Gawain なので、この“ye”を、「というのもあなた [Gawain] はブリトン
を失うことになるからです」と彼一人を指す単数形ととることもできるが、
 同時に円卓崩壊によってブリトンを失うことになる Arthur 王や Gawain を
 含めた円卓の騎士たち全員にあてた言葉ともとることができ、その場合
 “ye”は複数形ということになる。個人的にはこれは複数形の相手を指して
 いる可能性が高いように思われるものの、明確な証拠がないため曖昧さが残
 るのは否めないであろう。

そこで、亡霊の言葉に見られるこうした13例の不明瞭な Vを全て除くと、
 Vを単数形として用いているのは二つのエピソードを通して Gawain だけ
 一人ということになる。一つ目のエピソードで Gawain は、“Of be goost,
quod be gome, ‘Greue you no mare” (100) と、亡霊の出現におびえる
 Guinevere をなだめるために Vを一度使い、そして二つ目のエピソードで
 Galeron の挑戦を受けて立つにあたって王に忠誠を誓う際に、“Here my
trouth I you pli3t; / I woll counter with be knight / In defence of my ri3t,
 / Lorde, by your leue.” (465-69) と、Arthur 王に対して2度 Vを用いてい
 る。

二つのエピソードにおいて、Gawain よりも明らかに身分が高位であるのは王妃 Guinevere とアーサー王の二人だけである。Gawain が V を用いたのは、作品全体でわずか 3 回であるが、両エピソードを通し Gawain は決してこの二人に V 以外で語りかけず、また二人以外の登場人物、つまり自分より身分が同等あるいは劣る者たちには常に T を用いていることは注目に値するであろう。また繰り返し述べているように、このように “polite address of plural” である単数形としての V を用いているのは、両エピソードを通じ Gawain ただ一人なのである。以上のように *The Awntyrs* における T/V の使い分けという視点から authorship 研究を考慮すると、Gawain を除くその他の登場人物たちの T の多用や Gawain の T/V の用法など、同一作者説の立場を支持するような両エピソードの共通点を見出すことができる。

結び

本論では、これまで先行研究では扱われてこなかった *The Awntyrs* における二人称単数代名詞の T/V の用法に焦点を絞り、authorship 論争にかかわる二つのエピソードの共通性・類似性について具体的な数字を示しながら検討してきた。類似性を示す第一の要素として、登場人物たちは身分の差や文脈に関係なく T を圧倒的に多く使用していること、第二に Gawain のみ自分より高位の者には V、そして下位のものには T というように、標準的な区分どおりに T/V を使い分けているということが明らかになり、作品が同一作者によるものである可能性を高める結果が得られた。

ところで、なぜ Gawain のみが T/V を使い分けることができているのであろうか。本論が扱う範囲外のことはあるが、Chaucer が *The Squire's Tale* において “That Gawayn, with his alde curteisye” (170) と礼節の騎士としての Gawain の名声に言及しているように、*The Awntyrs* の作者は多くの ME ロマン스에登場する騎士の鑑としての Gawain 像を意識して、

そのイメージを尊重しようと Gawain に T/V を使い分けさせたのかもしれない。⁹ というのも、そもそもこの作品は、タイトルは *The Awntyrs off Arthure* つまり『アーサー王の冒険』であるものの、実際に亡霊に遭遇したり一騎打ちをしたりと、二つのエピソードにおいてロマンスヒーローとして活躍するのは Gawain だからである。

先述のとおり、この作品には4つの写本があるが、おそらくこれらとは別にオリジナルの写本があったのではないかと考えられている。このオリジナル写本が見つからない限り、authorship 論争に終止符を打つべき決定的な外的証拠を提出するのは難しいと言えるであろう。そうであれば、残された写本を基に少しずつ客観的な事実を積み重ねていながら authorship 問題に取り組むことが、問題解決に向けた唯一の重要かつ必要な方法であろう。本論は登場人物の T/V 使用についての言語的・文法的事実をわずかながらも積み重ねることで、同一作者説という視点での authorship 研究に貢献することができたと言えるであろう。

注

*本論は、国際アーサー王学会日本支部2003年度総会（慶應義塾大学，12月20日）における口頭発表の原稿に、修正加筆を施したものである。

- 1 本稿における *The Awntyrs* からの引用は全て *The Awntyrs off Arthure at the Terne Wathelyn: An Edition on Bodleian Library MS. Douce 324.*, ed. Ralph Hanna III. (Manchester: Manchester UP, 1974) に従うものとし、括弧内に行番号を示す。また、引用文中の下線は全て筆者によるものである。しかしながら、Hanna が基本的に拠った写本は四つの写本のうちのひとつである ms. Douce 324 であるため、四つの写本全てを出来る限り原文に近い形でテキスト化した Christianson も随時参考にした。
- 2 複数作者説と同一作者説の間での authorship 論争については、Phillips が詳しく述べている (64)。
- 3 二つのタイプの二人称単数代名詞の発達起源はラテン語の “tu” と “vos” に遡ることから、各々の頭文字である T と V というアルファベットが、これら二つのタイ

- ブの代名詞を表す記号としてしばしば用いられている (Brown and Bilman 253).
- 4 表 1 は Fennell (102) の図表の一部を便宜上まとめたものである。
 - 5 “Plural pronoun for polite address to a single person” という敬称としての V については、英語史関係の研究書であればほぼ確実に言及されている。Curme 15; Jespersen 44-45; Mustanoja 126-27 参照。
 - 6 例えば Shakespeare の作品における T/V については、ソネットから *Richard III* に至るまで、Berry (1958), Mulholland (1967), Barber (1981) などの研究が数多く提出されている。
 - 7 *Sir Gawain and the Green Knight* における T/V の交代移行についての Davis や Evans, Cottle, Kellner らによる研究の流れは、菊池清明 (1981) において詳しく説明されている。
 - 8 話し手と聞き手の関係に基づく T/V の使用頻度については、菊池清明氏が用いた統計表 (241) を参照している。
 - 9 Whiting は中世イギリスロマンス作品の中で Gawain と “courtesy” が結び付けられている回数を数え上げつつも、フランスロマンスにおいては Gawain は不人気であり、その性格描写もイギリスのそれとは大きく異なっていたことを指摘している (189-243)。

参考文献

- Barber, C. “‘You’ and ‘Thou’ in Shakespeare’s *Richard III*.” *Leeds Studies in English. New Series*. 12 (1981): 273-89.
- Berry, F. “‘Thou’ and ‘You’ in Shakespeare’s Sonnets.” *Essays in Criticism*. 8 (1958): 138-46.
- Brown, Roger and Albert Gilman. “The Pronouns of Power and Solidarity.” *Style in Language*. Ed. T. A. Sebeok. New York: John Wiley & Sons, 1960. 253-76.
- Chaucer, Geoffrey. *The Riverside Chaucer*. Ed. Larry D. Benson. Based on *The Works of Geoffrey Chaucer*. 3rd ed. Boston: Houghton, 1987.
- Christianson, C. P. *The Awntyrs off Arthure: An Edition*. Diss. Washington University, 1964. Michigan: University of Microfilms, 1970.
- Cottle, B. *The Triumph of English 1350-1400*. London: Routledge & Kegan Paul, 1969.
- Curme, G. O. *Syntax*. Boston: D. C. Heath and Company, 1931.
- Davis, Norman. Rev. *Sir Gawain and the Green Knight*. Ed. J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon. 2nd ed. Oxford: Clarendon Press, 1967.

- Dean, Christopher. *Arthur of England*. Toronto: University of Toronto P, 1987. Ed. Ralph Hanna III. Manchester: Manchester UP, 1974.
- Evans, W. W. "Dramatic use of the second-person singular pronoun in *Sir Gawain and the green knight*." *Studia Neophilologi*, 39 (1967): 38-45.
- Fennell, B. A. *A History of English: A Sociolinguistic Approach*. Oxford: Blackwell, 2001.
- Jespersen, Otto. *A Modern English Grammar: On Historical Principles*. Part II (Syntax 1st vol.). London: George Allen & Unwin, 1954.
- Kellner, Leon. *Historical Outlines of English Syntax*. Ed. Kikuo Miyabe. 6th ed. Tokyo: Kenkyusha, 1968.
- 菊池清明. 「*Sir Gawain and the Green Knight* における二人称代名詞 YE と THOU の交代移行について.」『英文学研究』58.2 (1981): 233-46.
- Metcalf, A. A. "Sir Gawain and You." *Chaucer Review* 5.5 (1971): 165-78.
- Mulholland, J. "'Thou' and 'You' in Shakespeare: A Study in the Second Person Pronoun." *English Studies: Journal of English Letters and Philology*. 48 (1967): 34-43.
- Mustanoja, T. F. *A Middle English Syntax: Part I, Parts of Speech*. Helsinki: Société Néophilologique, 1960.
- Phillips, Helen. "The Awntyrs off Arthure: Structure and meaning. A reassessment." *Arthurian Literature* 12. Eds. J. P. Carley and Felicity Riddy. Cambridge: D. S. Brewer, 1993. 63-89.
- Sir Gawain and the Green Knight*. Ed. J. R. R. Tolkien and E. V. Gordon. 2nd Ed. Rev. Norman Davis. Oxford: Clarendon P, 1967.
- Spearing, A. C. "The Awntyrs off Arthure." *The Alliterative Tradition in the Fourteenth Century*. Eds. B. S. Levy and P. E. Szarmach. Kent: Kent State UP, 1981. 183-202.
- Strang, B. M. H. *A History of English*. London: Methuen, 1970
- The Awntyrs off Arthure at the Terme Wathelyn: An Edition on Bodleian Library MS. Douce 324*.
- Wales, K. M. "Thou and You in Early Modern English: Brown and Gilman Re-Appraised." *Studia Linguistica: A Journal of General Linguistic* 37, 2 (1983): 107-125.
- Whiting, B. J. "Gawain: His Reputation, His Courtesy and His Appearance in Chaucer's *Squire's Tale*." *Medieval Studies* 9 (1947): 189-243.